

サテライトキャンパス先行事例 昭和大学（富士吉田キャンパス）

全学部の1年生が全寮制のキャンパスで共同生活することを通じて、全人的な医療人教育と早期からのチーム医療教育を展開。受験生の多くが寮に入ることを入学の志望動機にするほどの人気。

昭和大学

昭和37年（1962年）に薬学部を増設する計画がなされたが、東京都品川区に位置する旗の台キャンパスでは薬学部を増設できる校地面積が足りないという課題。

昭和40年（1965年）に富士吉田キャンパスを開設。



「地域医療」を通じて地域へ貢献



双方に大きなメリット

- 全学部の1年生は全寮制で学ぶ。グループ学習や共同生活により、「チーム医療」の基礎となる心構えを養う。
- 「地域医療」カリキュラムによる高齢者家庭訪問等を通じて地域における実践的学びを展開。ボランティア等の地域貢献活動も盛んに実施。

山梨県富士吉田市

学園都市建設計画による大学の誘致-道路や水道等のライフラインを富士吉田市が整備。その際、地元の後援会からも支援。

自然豊かな環境と広大な土地



- 多くの卒業生が市内やその周辺に就職
 - 約40名の卒業生が富士吉田市やその周辺で医院を開業
 - 約60名の医師、歯科医師、薬剤師などが富士吉田地域に2つある基幹病院に就職

サテライトキャンパスの課題と工夫

- 職員の通勤に負担
 - 職員寮を建設。短期滞在を含め、年間約100名以上の教員が宿泊
 - 授業科目によっては東京、横浜からの通勤が必要だが、教員を多く確保することで、一教員あたりのサテライトキャンパスでの担当科目を分散し、負担を軽減。
- アルバイト環境の不足
 - 大学の食堂や図書館の受付、キャンパス環境整備等、学内のアルバイト先を提供。

昭和大学 富士吉田キャンパス

1. 富士吉田キャンパス設置の経緯

- ・1962年（昭和37年）9月に、富士吉田市と土地購入の契約を締結。
- ・1965年（昭和40年）に開設。最初は第1学年男子の寮のみ開設。
- ・1967年（昭和42年）に女子寮竣工。第1学年男女全員の全寮制が完成。
- ・現在（2022年10月）、医学部（定員：120人※1）、歯学部（定員：105人）、薬学部（定員：200人）、保健医療学部 看護学科（定員：95人）、理学療法学科（定員：30人）、作業療法学科（定員：30人）※2の1学年が全寮生活中。

※1 上記定員とは別に地域枠選抜入試を実施

※2 理学療法学科と作業療法学科は、2023年4月にリハビリテーション学科（理学療法学専攻（定員：35人）、作業療法学専攻（定員：25人）に改組

2. 富士吉田キャンパスにまつわるQ & A

Q. 全学部の1年生が富士吉田キャンパスで全寮制生活を送ることになった経緯を教えてください。

A. -薬学部増設と豊かな自然の魅力がきっかけで富士吉田市へ-

- ・当初は、医学部だけの昭和医科大学という構想でしたが、薬学部を増設する計画が1962年（昭和37年）頃に始まりました。文部省（現文部科学省）に薬学部設置の意向を伝えたところ、旗の台のキャンパスのみでは医学部と薬学部を収容できる校地面積が足りないことが分かり、足りない面積を補う解決策を考えていました。
- ・ちょうどそのころ、富士吉田市で学園（官庁）都市建設計画があり、昭和大学がそこに名乗りをあげたと聞いています。
- ・富士吉田市は富士山麓に位置し、豊かな自然が残っている地域です。新たな設置基準上の必要面積を獲得する目的達成に加えて、優れた教育環境に大きな魅力を感じたものと思います。

Q. 富士吉田キャンパス開設にあたり、地元の地方公共団体等からはどのような支援がありましたか。

A. -土地の取得とインフラ整備-

- ・土地は、富士吉田市が学園都市建設の足掛かりとして富士山麓に誘致したもので、富士吉田市から購入しました。
- ・当時は「陸の孤島」で、道路などのインフラが整備されていなかったため、キャンパスを設置するにあたり、富士吉田市が道路や水道等のライフラインを整備されました。また、この際には富士吉田市が設立した後援会のご支援も頂戴したようです。
- ・施設の維持、運営に係る金銭的なご支援はありません。
- ・施設建設費などの費用は大学側の負担です。イニシャルコスト以外の運営費などの支援はありません。



Q.富士吉田キャンパス開設にあたり、どのような課題があり、それをどのように乗り越えましたか。

A. -寮の整備と富士吉田市内での居住-

- ・開設当初は、富士吉田市内に自宅のない職員が多く、通勤が大変でした。そこで、学生寮に加えて職員寮も建設しました。現在でも職員寮があり、多くの利用があります。
- ・寮は大学が直接運営しており、学生 700 名、教員の長期滞在用 30 名、短期滞在用 10 名の部屋を確保しています。
- ・富士吉田キャンパスに所属している教員は約 30 名います。その内、約三分の一が職員寮に長期滞在し、約三分の一が学校周辺に住んでいます。残りの約三分の一が市外から通勤あるいは寮に短期滞在するかたちをとっています
- ・富士吉田キャンパス所属の延べ教員数では、年間で約 100 名以上の教員が宿泊していることとなります（学部教員の宿泊延べ人数だと、1,000 名を超えるかと思います）。
- ・富士吉田キャンパスに所属している 30 名の教員のうち、約 2 割は本大学の卒業生で、全寮制度の中で学生と深く関わろうという思いの強い教員が多くいます。
- ・新規で教員を採用する際も、基本的には富士吉田市に住むことを前提にしています。将来的には、全ての教職員が富士吉田市に住み、学生ときちんと関わり、全人教育を行っていくことができるように努力しています。
- ・学生が寮生活をしているので、関わりのある教職員は常駐していることが望ましいと考えます。



Q.「富士吉田キャンパスだから」できていることについて教えてください。

A. -本物の自然の中での全人教育-

- ・富士山の麓に立地しているため、周りは自然に恵まれています。都会や作られた自然の中では感じるできない本物の自然環境の中で医療人教育、全人教育ができます。普段の学生生活の中で豊かな人間性を育むことができるのです。
- ・たとえば、校内に自然教育園という施設を設置しました。そこに 500 坪ほどの畑を作り、1 人の教員が 20 名ほどの学生を受け持つ学生指導担任制度のグループごとに野菜などを作っています。
- ・このような経験を通して、学生たちは様々な気づきを得ます。農薬を使わないで野菜を作ると虫が付くということは、スーパーでしか野菜を買ったことがない学生にとっては新たな気づきとなります。その他、指導担任と一緒に休日に自然散策を行うプログラムを学生自らが企画・実施し、発表するなど、様々な体験型のプログラムを行っています。





Q. 富士吉田キャンパス設置・運営上のメリット・デメリットを教えてください。



A. -1 年間の全寮制生活への高評価-

- ・富士吉田キャンパスができてから 55 年になりますが、当初は保護者や学生自身は寮生活をするということについて拒否反応を示していました。しかし、15 年ほど前からは、逆に寮生活を 1 年間おくることが自分たちの学びの上で非常に良い影響を与えているという評価を卒業生やその保護者、多くの受験生からいただいています。
- ・現在では、受験生の大半が寮に入りたいことを志望動機にするようになりました。時代とともに寮生活に対する評価が大きく変わってきています。
- ・昭和大学の寮生活は、1 人部屋ではなく 4 人部屋です。このような共同生活を行う点が、通常の寮生活と大きく異なっています。共同生活についても以前は否定的な意見が多くみられましたが、共同生活だからこそ非常に強い友情が育まれることや、学部を超えた繋がりができるなどの意見をいただくようになりました。
- ・社会人になる上で重要なコミュニケーション能力を修得する場として、全寮制共同生活が役立っていると考えます。
- ・全寮制にして、4 人一部屋という非日常を一年間経験するところに意味があり、この経験が他者を思う態度の涵養につながり、豊かな社会性を身につけ、医療人としての将来に大きく役立つということが段々と伝わってきていると思います。

A. -複数キャンパスの運営や移動の負担-

- ・大学にとって、キャンパスを複数運営することは簡単ではありません。
- ・授業は、学部ごとの授業と学部ごとではない共通の授業（昭和大学では学部連携と呼ぶ）があります。学部ごとの授業を行う教員に関しては、横浜、旗の台（東京）キャンパスから片道約 2 時間かけて来る人が多くいますが、一年次は学部専門の授業科目数が比較的少ないことと、本学は非常に教員数が多いので、一人一人の教員の負担はそれほど大きくないと考えています。
- ・また、教員には卒業生が多いので、自分が学生時代に過ごした場所を思い出す良い機会になるとらえている人が多くいます。
- ・ここ 15 年ほどは、富士吉田市に来ることが負担というよりは、楽しみにしている教育職員が増えてきています。
- ・卒業生が運営に大きく関わっているところが、他の大学と少し異なる特長だと思います。



Q.その他、地域の地方公共団体との関係性や富士吉田キャンパスでの学生生活等について教えてください。

A. -「地域医療」カリキュラムによる高齢者家庭訪問-

- ・「地域医療入門」というカリキュラムがあります。地域に住んでいる比較的元気な高齢者の家庭に学生がグループで訪ね、地域での暮らしや高齢者の思い出話を聞きとり、学ぶという授業です。都会で生まれ育った学生が3分の2以上いることから、このような地域での学びや交流を起点にして、ボランティア活動や地域イベントのサポート、あるいは災害時における救援の手伝いに結びついています。
- ・「地域医療入門」というカリキュラムそのものは大学独自のものですが、高齢者宅訪問は、毎年1年生全員（約600人）が4～5人のグループに分かれて訪問するため、受け入れ先を探すのがとても大変です。高齢者宅への声がけについては、富士吉田市健康福祉課にご協力いただいています。
- ・高齢者宅へ訪問した学生が一番驚くことは、高齢者宅でとても歓迎されることです。大学側は1時間ほどの訪問とお願いしていますが、お茶やお菓子、ご飯などをいただき、気がついたら夕方になるなど、とても歓迎されます。高齢者にとって、学生は孫の世代にあたるので、娯楽のようになってしまい、有難いような、困ったような面もあります。
- ・学生の観点からみると、高齢者の生活については自分の祖父母しか知らず、その他の高齢者の暮らしは知りません。夏休みや冬休みにしか祖父母と会わない人は、高齢者との話題がなくて困ります。
- ・高齢者の話題は戦時中や終戦後の苦労した経験談などが中心のため、話題についていけない学生もいます。
- ・このような経験から、歴史や文化を学ぶことの重要性に気がついたという感想はよく聞かれます。

A. -アルバイト環境 -

- ・基本的に朝6時から夜10時までは授業と学生の自由な時間です。逆に、夜10時から朝6時までは門限であり、必ず寮内にいなければなりません。授業終了後から門限までの時間に関しては、アルバイトをすることは個人の判断となっています。
- ・地域住民にとって、昭和大学の学生は時間的な制約はあるものの、貴重な人的資源です。
- ・ただ、富士吉田市内のアルバイト先は都会に比べて少ないので、大学の食堂の食器洗いや図書館の受付、学内整備など、学内でもアルバイト先を作って募集しています。

A. -卒業生の富士吉田市内での就業 -

- ・富士吉田市やその周辺で医院を開業している卒業生は約40名います。また、富士吉田地域に2つある基幹病院には約60名の医師、歯科医師、薬剤師などが就職しています。山梨県内の保健所、企業への就職などで県に戻る人も多数いて、実務実習や地域医療の実習などを実施する際にご協力いただいています。

